

ごぽち 主人様

著 島津出水
画 蔓木銅音・はましま薫夫・中乃空
原作 SkyFish poco



ぶちばら文庫

登場人物

麻黄 大 (あさぎ ひろ)

ドエスな性癖を持つ青年。父が海外にいるためひとり暮らしだったが、千羽が帰国し、一緒に暮らすことに。

やま みね ひじり
山 峰・聖
・バーナード

学生自治会長を務める、学園の女王様の存在。大とは喧嘩友達。

はなまどか
華 門 紫 乃

華道部の部長を務める。昨年の自治会長で、聖も頭が上がない。

と い ふう か
戸 井 風 花

大のクラスメイトで自治会に所属する。あだ名は半デコメガネ。

ひなみどり ちようこ
雛 緑 蝶 子

千羽の母で、大にとっても母のような存在。大の父と再婚が決まる。

ひなみどり
雛 緑
千 羽

大と幼少期から一緒に過ごしてきた、妹的存在。大のことが大好きで、「お兄ちゃん」と呼ぶ。甘えん坊で仔犬のような性格。



「そんな、そんなこと……」
優しくさやくと、千羽は泣きそうな顔で視線を逸らせてしまう。
オレとしては、答えはどちらでもいい。ただ、千羽がオレのペットなら、答えなきやいけないということだけは決まっていた。
果たして、千羽は――。

「ふあっ……う、うん。してた、してたのっ！ お兄ちゃんのこと考えて……指で、そ

うやっていじって……ふぁっ!!」

「……そうか。アソコの入り口を、こうしてこすっていたのか？」

「はうんっ! うんっ……してたの。指で何回も……」

「こっちはどうだ? クリもいじったんだろ？」

問いながら、敏感な突起を指先で軽く撫でてやると、千羽は大きく身をよじった。

「あぐっ!! んんっ……うん、いじった、いじってたのお!」

「こうしてこね回してたんだろ? お兄ちゃん、お兄ちゃんって……」

「あつ! あつ! そうだよ。グリグリっついじって……んきゅうっ!!」

「エロいな千羽は。エロくてイヤらしいヤツだ……毎日毎日、ひとりでエッチなことばかりして」

「違うの、毎日じゃ……ないよっ。そんなに、エッチな女の子じゃないの……たまにしか、しない……」

「ふうりん。じゃ、オレを想ってくれたのもたまにだけなのか？」

「ち、違うよっ。千羽はいつだってお兄ちゃんのことを……」

「朝も昼も夜も？」

「うんっ! うん、そうだよ。朝も昼も夜も……お兄ちゃんのことを、お兄ちゃんのことだけをっ!」

「じゃ、毎日、朝も昼も夜もオナニーしていたんだろ? オレのことを想ってさ」

「えっ……あっ……」

——千羽はきつと気づいている。ペットとしてのマナーを。オレの言わせたいことを。だからオレは優しく千羽の髪を撫で、その言葉を待った。

「あつ、千羽……千羽は毎日……」

千羽はしばらくの間、ためらいがちに言い淀んでいたが——やがて、告げた。

「……ち、千羽は毎日、ひとりエッチしてたの。お兄ちゃんにしてみらつてることを想像しながら……毎日、毎日……朝も夜も一日中、エッチなことをしてました……」

「そうか、千羽はイヤらしい女の子だな」

「うっ……うん、千羽は……ご主人様のペットの千羽は、エロい……女の子です」
そう告白すると、千羽は緊張の糸が切れたのか、グッタリと身体力を抜いた。

「そうか。千羽がイヤらしいのも、オナニー中毒なのも、オレの責任だな。ちゃんと責任はとってやろう」

オレは、そんな千羽の身体を優しく抱き締め、閉じていた脚を大きく開かせる。

「ふわっ!? んくうっっ!!」

「千羽のアソコ、もうすっかりエッチになっちゃってる」

隠していた千羽の奥の部分はすっかり潤みきつていたが、まだ開いているというほどで

はない。千羽以外の指に触れることもなかったその場所は、固く閉じて一筋だけのスリットにも見える。

「見ないで、恥ずかしいよね……あつ、ダメっ、いじつちゃ……んくっ！ ああっ……」
スリットを指でなぞり、千羽の一番深い部分へと少しだけ奥へ指を進める。

クチュクチュと濡れた音——子犬がミルクを飲むような音が、部屋に満ちていく。千羽の可愛らしいあえぎ声とともに。

「ふあっ、あつ……そこ、そこ……うっ、あああっ!!」

「気持ちいいのか？ 千羽のここ、すごいことになってるぞ」

「あつ、気持ちいい。気持ちいいよね……もお、おかしいの。おかしくなっちゃって……ああっ！」

「本当にエッチだな、千羽は。触ってもいないのに、乳首をこんなに勃たせて」

アソコを2本の指で刺激したまま、勃起した千羽の胸の先端を口に含む。何度も転がすようにして、そのまま少しだけ歯を立てて刺激すると——。

「えっ？ んぐっ!! んんっ……!!」

千羽は唐突に口を閉じ、強く上体を硬直させて——再び脱力した。

「はあ、あつ……ああっ……」

「目の焦点が合っていない……イッちゃったか。そっか、千羽の小さな胸は性感帯だったん

だな。それならこうして……」

胸の先端に何度もキスをする。そのたびに、敏感な千羽の身体は小刻みに震えた。

「ひぐっ！ ふわっ、あつ……ひゃっ、いやっ……お兄ちゃん、ムネ気持ちいい、気持ちよすぎて……あああっ!!」

オレは、上り詰める千羽の身体を焦らすように、右の乳首にキスをして、左の乳首を甘咬みして——。

「ひっ!? んくっ……んんっ!! お兄ちゃん、それ……イヤっ。感じすぎて……イヤっ、ダメっ、ダメえつつ!!」

——またイッた。本当に千羽は胸を感じるんだな。

「よしよし、もっともつと調教してやろうな。最初から乳首でイけるくらいにさ」

今度は先端から口を離し、胸の谷間から舌でなぞるのように、ヘソまで優しくキスをする。

「お兄ちゃんが……千羽の身体食べちゃってる！ 全部食べられちゃう!!」

「ああ、食べてあげるよ。ムネも、おヘソも……それに、アソコも……んっ」

そして、千羽の股間に顔を埋めた。

「んっ、んんっ!? イヤっ、そんなところにキスなんてっ……あつ、んんっ!!」

汗で濡れた千羽のそこは、少ししよっぱくて、舐めれば舐めるほどイヤらしい液があふれてくる。オレがその液を飲んでやると、千羽は背筋を反らし、甘い声を漏らす。

「はあはあ……んくっ！ んんつつ!! あっ、お兄ちゃんっ……すごいよ、あっ……また、来ちゃう。来ちゃうよお……ああっ、あくつつつつ!!」

——絶頂。さっきイッてから、さほど時間が経っていない。
「イキ癖がついたかな？ でも、少しは我慢することを覚えないうな。千羽はペットなんだから、ちゃんと奉仕もしてくれないと」

「あっ、うん……千羽はペットです……お兄ちゃんにも……」

半ば放心した状態で応えようとする千羽に、オレはここでピシヤリと言ひ渡す。

「ご主人様だ」

「あっ、うん。ご主人様にも……ご奉仕したいです……」

「ああ、次はちゃんと調教してやろう。まあ、今日は千羽をオレのものにする方が先決だ」
言いながらオレはベッドに座り、両手を広げて呼び寄せた。

「さあ、千羽。おいで……」

千羽は、何度も上り詰めてフラフラになった身体で、オレの胸へ倒れ込んだ。オレはその身体が愛おしくて、思わず強く抱き締めてしまう。

「良い子だ、千羽は良い子だな」

「あっ、お兄ちゃん……ご主人様……」

千羽の髪を優しく撫で、呼吸が整うのを静かに待つオレ。

いよいよその時——千羽の身体に、オレというものを刻み込む時だ。だから、精一杯優しくしてあげなければ。

千羽が落ち着くと、オレは腰の位置を微調整して、互いの性を密着させた。

「分かるか？ お前のアソコにオレのものが当たってるのが」

「うん……すごく熱いのが分かるよ。ご主人様のとても固くて熱くなってる……」

「これから千羽の中にそれが入るんだよ。いや……千羽が自分で挿れるんだ」

「えっ？ 千羽が……」

「イヤか？」

オレが尋ねると、千羽は「ううん、イヤじゃないよ」と首を振った。

「上手くできないかもしれないけど、痛くて泣いちゃうかもしれないけど……嬉しい」

「そっか……じゃ、ちゃんと言って。千羽はどうしたい？」

ゆっくり促すオレの耳に——少し声のうわずった、真摯な言葉が届く。

「お兄ちゃんの……ご主人様のおち○ちんを千羽のアソコに……挿れさせてください。千羽の初めてをご主人様……お兄ちゃんにもらってほしいんです」

「……オレも千羽が欲しい。千羽の初めてを奪いたい……さあ、腰を上げて」

「はい……あっ、んっ……怖い……」

素直にオレに従うものの、千羽の顔には不安の色がほの見える。

ぷちばら文庫
ぽちとご主人様

2011年 11月25日 初版第1刷発行

■著 者 島津出水
■イラスト 蔓木銅音・はましま薫夫・中乃空
■原 作 SkyFish poco

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©IZUMI SHIMAZU ©2011 SkyFish poco/SkyFish

Printed in Japan 2011

PP034

好評発売中

ぶちばら文庫17

沖田和彦 著

熊虎たつみ 画

Parthenon 原作

定価 670円(税込)

「熊虎たつみ」による
描き下ろし挿絵も収録!



妹天使と
子作りしちゃう!

天界非公認セックスで、愛する妹を救え!

いもうと 妹
はちまきせっくす